

## シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕

～デカルトの独自の用法とその認識論～

村 上 吉 男

筆者は前号<sup>(166)</sup>に、シモーヌ・ヴェーユにおいて〈新しいデカルト〉を祖上にのぼさせ、これを筆者が「もう一つの真理の探求」と名付け、彼の三つ目の用法にみなしおき、そのもとで成り立つとみる認識論の一能力に、たとえば彼のいう〈sentiment (感覚)〉とは別に、彼女は〈sensibilité (感受性)〉を書き加え、同時にこの能力を骨格とする認識論を彼の上記した用法の認識論にかさねあわせていたと主張した。〈新しいデカルト〉の用法を踏まえた彼女の認識論の諸能力はこの〈感受性〉や、〈sensibilité passive (受動的感受性)〉以外、彼がいう諸能力に倣って使用されるにしても、〈raison (理性)〉ではなく、〈感受性〉をその中心に位置させるし、前記したように<sup>(167)</sup>、彼は諸作品に〈感受性〉の語を取り上げたりしないのだから、筆者がたんに両者を比べんとするうえでさえ、彼女は独自といってよい認識論をかたちづくり得たわけである。

〈sensibilité (感受性)〉は〈sentiment (感覚)〉と同様に、既出引用文⑤<sup>(168)</sup>中の〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉、要は対象が身体器官に受容される〈運動〉から、さらに〈精神 (esprit)〉へと伝えられる一連の〈運動〉を通して〈esprit〉まで到達したとき（伝わらない場合は除く）、今度はときに〈esprit〉の先天的能力とされる〈感じる (sentir)〉が身体で感受性にさせた対象に働きかけ（運動し）ては、〈esprit〉での新たな（後天的）能力となって〈esprit〉に〈表象〉するのである（〈sentir〉が「能動」的に〈運動〉しない場合は除く）。だから〈感受性〉の〈表象〉の過程にあって、〈sentir〉を彼女も利用せざるを得ないことは、彼女がデカルトの「もう一つの真理の探求」を踏まえると、また〈感受性〉や〈受動的感受性〉のほかは彼の諸能力に倣うという謂に受け止められるが、しかし確かなことは、同じ〈sentir〉の能力の助けを借りるにせよ、新たに（後天的に）〈表象〉する能力〈感受性〉は彼女にとって〈量的〉であり、〈質的〉とみられよう、彼のいう〈sentiment (感覚)〉と似ても似つかなく

なるということである。〈感受性〉で成るからこそ、独自といえる彼女の認識論で、そのうえ〈感受性〉がこの中核を占めると断じられるのは、〈感受性〉がつねに筆者のいう「認識の起こり」にかかわらずにおれない能力であって、これを基にしないでは、彼女の認識論が展開をみないからである<sup>(169)</sup>。

〈sensibilité (感受性)〉なる能力は繰返すまでもなく、学士論文『デカルトにおける科学と知覚』第二部に初出の用語である。〈感受性〉を盛り込む彼女独自の認識論が彼の「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論を手本にせざるを得ないとみたは、彼女の一考あつてのことによるであらう(次段落参照)。ただこれを、彼女が学士論文において、一方で彼の認識論的諸思想を考察し、他方でその一に彼女独自の認識論をかさねあわせたとした前記に従い再度確認すると、シモーヌ・ヴェーユが〈感受性〉を彼の三つ目の用法の認識論を説くなかに掲げるにせよ、〈感受性〉自体は彼がそこで用いた〈精神(esprit)〉の能力〈sentir〉を利用したがゆえに、〈sentir〉を手本とせずに生成に至らないわけである。それをはじめとする「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論(の諸能力)を手本にしたからこそ、彼女独自の認識論が成り立つといつてよいのは、学士論文第二部以外のはかの諸作品には、彼女独自の認識論の、まとまって論じられる形跡が見当たらないからである。学士論文第二部に彼女独自の認識論を見出せることはまた、彼女を哲学者<sup>(170)</sup>と呼ぶにふさわしくなる。このこともあつてか、学士論文第二部は筆者にとり、読み流し、見過ごしには到底できないのである。

それはともかく、ここで想起せねばならぬは、「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論が〈日常的用法〉の認識論の諸能力を吸収し、これと一になる前提で成ったことである。そのほか諸能力といえは、デカルトには〈真理の探求〉たる用法の認識論に語られる諸能力と「もう一つの真理の探求」用の諸能力があつた(後者の一例として、筆者のいう「独自の理性」が見出せた)。シモーヌ・ヴェーユはこの三つの認識論の各諸能力に対し、その一なる〈sentir〉を〈感受性〉という、彼にはない能力を誕生させるために利用し、これ以外を取捨選択しつつ、模することで、彼女独自の認識論の形成に活用させた。このことはさらに、彼女独自の認識論が彼の三つの認識論からの集約でなしに、もっぱら「もう一つの真理の探求」の認識論に見倣って、当初より一として仕上げられたことを、なおかつ彼女が彼の三つの各認識論での「認識の起こり」の過程

をすべてではないが、正しいと認めて踏襲したことを示唆させる（彼女独自の認識論はもとより、〈真理の探求〉のような〈感覚〉排除の認識論ではなかった）。ただし彼女は、彼が〈真理の探求〉で第一命題<sup>(171)</sup>とした《Cogito（コギト）》がゆえに、〈わたしは存在する〉ことで展開する存在論やその実践論より、〈わたしは思惟する〉ことで成る認識論の方を優先させた。認識が先に立って、存在し得ることは、既出引用文⑩<sup>(172)</sup>を読むと察知されることである（後述）。また彼女にとって、認識論からはじまり、存在論や実践論に亘って追究し、これらを体系づけるは、彼が彼の哲学を目ざしたように、哲学なのであり、その哲学の構築なしに、彼女を哲学者とみなすは、端から不可能である。しかも彼女は己れの哲学を、学士論文をはじめとした諸作品に書き残すだけにとどまらず、かつ机上の空論に終わらせずに、短い生涯に活かした哲学者であったといえることができる。

さて前号の〔補Ⅲ〕の②や③までにおいては、筆者が主に〈精神（esprit）〉の能力〈sensibilité（感受性）〉を取り上げたに対し、今回は、本稿第二段落に記しおいた「既出引用文⑩中の〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉、要は対象が一身体器官に受容される〈運動〉」に関連したことから、筆を起こさねばなるまい。それには、まず身体諸器官のどれかに受け入れられた〈外来的な何か（事物）〉は何かを質することが、そしてこれにあわせ、シモーヌ・ヴェーユのすでに一見した引用文〈Dans la connaissance en général, les apparences sont données par la sensibilité...（認識一般において、外観は感受性によってもたらされる）〉<sup>(173)</sup>を再度検討することが課せられる。〈外観〉はたとえば、目という感覚器官（視覚）で捉えられる〈外来的な何か（事物）〉、すなわち対象である。視覚はこうした対象を見る、神経の〈運動〉ともされる。「対象を見る、神経の〈運動〉」は、「見る」という以上、およそ対象に目が向かう、能動的〈運動〉になり（向かわずに、対象が目に入るときがあるが、ここではその場合を除く）、同時に「見る」からして、感覚器官（視覚）に、対象がそれ自体としてでなく、〈刺激〉あるいは「神経伝達物質」として受け入れられる〈運動〉でもある。

## デカルトの場合

前記の〈運動〉に関して、筆者が前者では能動を、後者では受動を意味させ、さらに両者が「同時に」生じるように記すは、デカルトの言を頼りにいうと、*l'action et la passion ne laissent pas d'être toujours une même chose...*（能動と受動（たる〈運動〉）はたえず同じ一つの事柄にせずにはおかない（括弧内は筆者））<sup>(174)</sup> ことになるからである。これをとくに〈日常的用法〉や「もう一つの真理の探求」の各認識論として、彼が身体的能力に、次回に主に語る〈ressentir〉を配し、〈ressentir〉が今問うている「対象」に〈運動〉することで、感覚器官に身体の〈sens（感覚）〉を誕生させ、なおまたこの〈sens〉が上記二用法それぞれの〈âme（腺）〉や〈esprit〉に伝わって、各〈精神〉でその先天的能力〈sentir〉の〈運動〉を受けるならば、〈sens〉は各〈精神〉の新たな能力〈sentiment（感覚）〉になろうと語っていたことに当てはめると、〈能動と受動〉によってもたらされる諸能力で、真先に「認識の起こり」を可能にするのが〈sens〉であり、次いで新たな「認識の起こり」の能力としての〈sentiment〉でしかなくなるわけである。たとえば前段に述べた目（感覚器官）にあって、その「見る」という〈能動〉は一般に、「対象」が目を受容される〈受動〉なくしてはむろんのこと、〈能動〉が〈受動〉より先に働かずして、身体の〈sens〉を目（感覚器官）に生み出しはしない。このように〈能動と受動〉を「対象」ではなく、目（感覚器官）の方からみれば、彼のいう通り、〈能動と受動（たる〈運動〉）は同じ一つの事柄〉にすぎなくなろう。

だがデカルトが他方で、「対象」のいわば〈sens〉化は身体諸器官の各〈自動機械〉<sup>(175)</sup>〈運動〉に起因し成るとも語る際、目（視覚）を例に続けていうと、この〈自動機械〉〈運動〉は〈受動〉において、目（視覚）には「対象」が〈刺激〉または「神経伝達物質」として受け入れられるそれになるが、しからば〈能動〉において、これに相当させるは何かなのである。彼が〈能動〉は何んたるかを示さぬかぎり、当然〈能動〉と記すことが、ましてや〈能動と受動（たる〈運動〉）はたえず同じ一つの事柄にせずにはおかない」と書き込むことすら不可能になるであろう。〈能動〉とは先きの例の場合、「対象」（〈刺激〉または「神経伝達物質」）に働きかける<sup>(176)</sup> ことであった。そこで彼はこの〈能動〉に、身体諸器官での「見る〈voir〉」などを統括させる、前記した語〈ressentir（感覚

する))を用意し宛がうことになる。

筆者はこれまで、身体諸(感覚)器官における、「見る(voir)」を筆頭に、この種の能力を代表させる〈ressentir〉さえも当然ながら、身体(または身体の先天的能力)と記してきた。たとえば〈ressentir〉が「対象」に働きかけるならば、身体諸器官の一に身体の〈sens(感覚)〉たる、身体の新たな能力を〈表象〉するであろうと。このときしかし、筆者にとっては、〈ressentir〉が「対象に働きかける」ことはまったき〈自動機械〉〈運動〉に因るとはいいい切れないと、同様に先記でいう「認識の起こり」(身体の〈sens〉のこと)もまったき〈自動機械〉〈運動〉で成るとはかぎらない<sup>(177)</sup>と察知される。要は〈自動機械〉〈運動〉が「対象に働きかける」〈能動〉にあつて、身体諸器官での身体(能力)〈ressentir〉に依拠し、〈ressentir〉をして身体諸器官に〈sens〉たる「認識」を生じさせるがゆえに、この〈ressentir〉の〈運動〉は、すでに語った、「精神」の先天的能力〈sentir〉の「働きかける」〈運動〉<sup>(178)</sup>と同様に、身体(延長)だけの〈運動〉とみるのでは推し測れない、いわば人間(精神または思惟)の意志に、とどのつまり註(175)註欄による〈自我〉に関与した〈運動〉であると指摘しておかねばなるまい。〈ressentir〉が身体(物)の能力といわれたにせよ、その能力(働き)が実際可能になるはここでは、身体(諸器官)自体のもつ能力(働き)と断じられることなく、そこに他の力(能力)の助けを得て動くことにあろうし、他の力をば人間(精神または思惟)に解さずに、「能力」なる本来の語意が消し去られるどころか、この加味された語意のない「能力」には、「先天的」と名付けることすらできなくなるのである。

それに〈ressentir〉がデカルトに語られよう、例の三つの用法でいかに用いられたかをここに知ること、〈ressentir〉が人間(精神または思惟)に与らずにおれないことが分かってこよう。〈真理の探求〉において、人間は〈esprit(精神)〉または〈pensée(思惟)〉であり、身体(〈étendue(延長)〉)<sup>(179)</sup>ではないからして、身体(能力)〈ressentir〉が介在してくるとはいえないし、この能力が「精神または思惟」に見立てられ、その〈運動〉にあつたとしても、「精神または思惟」にすらかかわることは不可能であると繰返さざるを得ない。しかしながら〈日常的用法〉や「もう一つの真理の探求」において、〈ressentir〉が身体(諸器官)自体のもつ能力(働き)にとどまるとみなされるならば、逆からいうに、〈ressentir〉が「人間(精神または思惟)」の意を受けた能力であると弁えて

おかないならば、およそ前者の用法での〈âme〉や後者の用法での〈esprit〉たる各「精神」と各身体とはそれぞれ一続きにつながっていること、そのうえで合一することはなくなるのである。そうみえるのはなぜかはしかし、〈ressentir〉がまず〈sens〉たる「認識の起こり」や〈思惟（する）〉に関係することを以下に掲げる引用文で明らかにしたうえで、解答することにしよう。

⑪ Je suis le même qui sens, c'est-à-dire qui reçoit et connaît les choses comme par les organes des sens, puisqu'en effet je vois la lumière, j'ouïs le bruit, je ressens la chaleur. Mais l'on me dira que ces apparences sont fausses et que je dors. Qu'il soit ainsi; toutefois, à tout le moins, il est très certain qu'il me semble que je vois, que j'ouïs, et que je m'échauffe; et c'est proprement ce qui en moi s'appelle sentir, et cela, pris ainsi précisément, n'est rien autre chose que penser. <sup>(180)</sup>

この同じわたしは感じる（sentir）ものである。すなわち、実際わたしは光を見、騒音を聞き、熱を感覚する（ressentir）のだから、諸事物（事柄）を感覚諸器官を介して受け入れたり、認識したりするものである。だがこれらのことは見せ掛けの外観なのであり、わたしが眠っているからだそうだ。かくあるやもしれぬが、しかし少なくともわたしは見る、聞く、熱くなる（熱を感覚する）と思われるということはきわめて確かなことである。これこそまさしくわたしにおいて感じる（sentir）と呼ばれることであり、このように正確に解するならば、これは思惟する（penser）以外の何ものでもなくなるのである。（括弧内は筆者）

上記引用文⑪と一部共通するとみられる引用文をさらに持ち出し、これをもとに、筆者がこれまでさほど注釈し得なかったこと、要は〈ressentir〉や〈sens〉に答えなくてはならない。

⑫ Ces objets (de nos sens) qui, excitant quelques mouvements dans les organes des sens extérieurs, en excitent aussi par l'entremise des nerfs dans le cerveau,... <sup>(181)</sup>（括弧内は筆者）

わたしたちの感覚の諸対象はそれぞれ、外的感覚諸器官（のいずれか）において、ある運動を引き起こしながら、神経を介して、脳においてその同じ運動を引き起こす。（括弧内は筆者）

引用文⑰は筆者に、〈見る（voir）〉〈聞く（ouïr）〉と〈感覚する（ressentir）〉がおのの身体の（先天的）能力であり、〈光〉〈騒音〉〈熱〉が身体の各〈sens（感覚）〉たる新たな能力になることを明示させる。（ただし以下には、⑰で主に語られる〈sentir（感じる）〉に関したことなく、身体の先天的能力を一括している〈ressentir（感覚する）〉や身体の新たな能力となる〈sens（感覚）〉のことが先きに取り上げられる。）〈sens〉の方はまた、引用文⑱によると、〈外的感覚諸器官（のいずれか）〉の、たとえば目（視覚）において、〈ressentir〉が「対象（光）」に「働きかけ」ては、〈光（sens）〉なる〈運動を引き起こす〉ことに受け継がれ、ときにこの〈sens〉を〈神経を介して〉〈脳〉へ伝え、今度は〈脳においてその同じ運動を引き起こす〉当の〈感覚〉でしかないことになる。

筆者はさらに引用文⑱に注目するに、デカルトがそこに〈脳〉と書き込む以上は、彼が〈脳〉を〈精神（âme）〉と捉えるところより展開する〈日常的用法〉を想定しているとの読みをせねばならぬということである（⑱を〈真理の探求〉を語ると読むも可能であろう。それでもそのときは〈精神（esprit）〉から、〈ressentir〉たる〈運動〉自体を、またかりに〈sens〉が〈表象〉したにしても、これをも「排除」する必要があったし、それどころか〈脳〉をそれとして質すことはなかった。もちろん⑱を「もう一つの真理の探求」に当てはめてもよいことはすでに一見している。何しろこの用法は〈日常的用法〉をいっしょにしたそれであったから）。すると何よりもまず、〈sens〉が〈脳（âme）〉に伝わり、〈âme〉で〈その同じ運動を引き起こす〉とは何かと問われよう。それは〈sens〉が〈sens〉なるままの、しかし身体でなくして、〈âme〉の能力となって〈同じ運動を引き起こす〉ことを示唆させることにある。これにより、〈âme（脳）〉でも〈sens〉のみられることが証明されるし、〈脳〉が〈âme（精神）〉であることは、彼が〈脳〉の一部位をなす〈腺（H）〉を〈精神〉とみなした引用文をすでに掲載していた<sup>(182)</sup>ことで了解される。

次に、〈その同じ運動〉は〈âme（腺）〉でさえ〈sens〉を〈表象〉するとされるかぎり、〈腺〉における〈sens〉はいかにして〈表象〉したかである。それは、

筆者の言では後述する、〈理性的精神 (âme raisonnable)〉の先天的能力〈sentir (感じる)〉の「働きかけ」(〈運動〉)を必要としないほど、〈sens〉が〈sentir〉の〈運動〉の量よりまさったために、その「閾値」を超えさせる〈運動〉でもたらされた〈âme (腺)〉の〈感覚〉になると見通されるほか、シモーヌ・ヴェーユの言では〈運動の変化は質的である〉<sup>(183)</sup>に相当する〈感覚〉であると理解される。そこで筆者の記した「閾値」に彼女の上記註の文章を適合させると、〈sens〉は〈âme (腺)〉で、〈sens〉としての「閾値」を超えたこと自体がその〈運動の変化〉を伴わざるを得なくなって語られるしかない〈âme (腺)〉の〈感覚〉となるにちがいない。

そして、この〈âme (腺)〉に〈表象〉した〈sens〉をしてはじめて「認識の起こり」といわしめるか。そうではない。筆者は身体〈感覚諸器官 (のいずれか)〉において、〈ressentir〉が「対象」に「働きかけ」て、「対象」を〈sens〉にすると、その「認識の起こり」が成るとみる。なぜか。ところが筆者が身体感覚器官での〈sens〉を「認識の起こり」といえるほど、人は「なぜか」の理由を求める以前に、身体の〈sens〉は果たして「認識」に関与するのかと疑問に思うどころか、身体の〈sens〉を「認識」の範疇に組み入れるのを否定する以外なからう。だが筆者はデカルトが〈ressentir〉を執拗に取り上げるがゆえに、〈ressentir〉が今課題としている、「〈sens〉たる「認識の起こり」や〈思惟 (する)〉に関係する」は間違いないと先きに結語しておく。

「認識 (connaissance)」とはもとより、引用文⑩に記される動詞不定形〈connaître (認識する)〉の名詞であって、「知る作用」のことである。ここからさらに⑪を参照すると、〈認識する〉はデカルトのいう、〈penser (思惟する)〉に属す一能力となり<sup>(184)</sup>、〈能動〉〈運動〉であり、筆者の何度も繰返す「働きかける」ことでしかない(〈受け入れる〉と訳した動詞不定形〈recevoir〉にも「認める」の意が含まれるので、〈connaître〉と同じに押えてかまわない)。これと同様、身体の先天的能力〈ressentir (感覚する)〉を「働きかける (能動)」といい続けてきた筆者にとって、だからこうした〈能動〉は何かを明かす必要があるばかりか、〈能動〉にて成る身体の〈sens (感覚)〉が身体 (感覚諸器官) においてでさえ、「認識 (の起こり)」とみられるはなぜかが質されなくてはならなくなる。

「認識」は確かに、「働きかける (能動)」〈運動〉からもたらされようが、しかし当の〈能動〉〈運動〉は前記したごとく、「まったく (自動機械) 〈運動〉」



ではあり得なくなる。「認識」が「まったき〈自動機械〉〈運動〉」で成るとみるだけであるならば、たとえば〈日常的用法〉において、〈脳〉も身体感覚諸器官と同じ扱いを受け（〈脳〉の「まったき〈自動機械〉〈運動〉」は身体感覚諸器官のそれと同様であること）、〈脳（身体）〉として「認識」を生じさせる以外ないのだから、デカルトは何も〈脳〉の部位である〈腺〉や〈脳本体〉をそれぞれ、〈âme（精神）〉や〈âme raisonnable（理性的精神）〉といい換えることは必要なかったであろう。その通りである。しかし彼はそうした〈脳〉を実際に〈精神〉と置き換えていたのである。

デカルトが〈脳〉を〈精神〉とみなす以上、〈脳〉としての〈自動機械〉〈運動〉はまた、〈精神〉としての〈自動機械〉〈運動〉でなければならぬはずである。いやそう断じられるは、すでに引用した註(175)註欄で、彼が〈そのほかの自動機械（すなわち自分自身（自我）を動かすそのほかの機械）〉と述べ、さらに続けて、〈avec tout ce qui est requis pour son (le principe corporel des mouvements) action（諸運動の身体的原理の活動にとって必要なすべてのものとともに）（原語括弧内は筆者）〉<sup>(185)</sup>と書いた際に、〈そのほかの〉を〈すべてのもの〉に、あるいは〈自分自身（自我）〉を〈そのほかの〉や〈すべてのもの〉の一に織り込ませておかねばならないからである。人間にこの例をみる場合、また彼のいうように、人間の〈脳〉を〈精神〉と解する場合、〈そのほかの〉や〈すべてのもの〉の一はもはやいうまでもなく、〈思惟（する）〉にほかななくさせる（だから筆者が以前から何度となく、「人間（精神または思惟）」と記したのは上記を明かすにあった表現でしかなくなる）。〈脳（精神）〉の〈自動機械〉〈運動〉に〈思惟（する）〉が加えられるは、〈思惟（する）〉ことの〈自動機械〉〈運動〉にのみ、たとえばその〈認識する〉をはじめとする「認識」の真意が、かつ〈認識する〉を含めた〈精神〉の諸能力の「働きかける（能動）」というかの〈運動〉の真意がみえると読むことなのである。

〈そのほかの〉や〈すべてのもの〉の一である〈思惟する〉〈自動機械〉の〈能動〉〈運動〉自体が〈精神〉の諸能力に、しかもその生まれつきの（先天的）諸能力になるといえるし、デカルトにあって、〈思惟する〉諸能力が「先天的」であるからして、〈日常的用法〉を例にとると、〈脳〉をはじめて〈精神（âme）〉に置き換え得るとみえるのである。そこで〈âme〉の諸能力の〈能動〉が〈思惟する〉〈運動〉であるのに対し（この証明は〈認識する〉でわずかにした

が、後段で詳しく触れる〈sentir（感じる）〉でも試みる）、同じく〈能動〉と語ってきた、身体の〈ressentir〉の方は、果たして〈思惟する〉ことの〈自動機械〉〈運動〉に与する能力なのかどうかである。

これについて、筆者はすでに、「〈ressentir〉が「人間（精神または思惟）」の意を受けた能力である」と答えておいた。だからここではその根拠を示すことが課せられる。それは思うに、〈真理の探求〉の〈精神（esprit）〉ではむしろのこと、〈日常的用法〉の〈精神（âme）〉や「もう一つの真理の探求」の〈精神（esprit）〉においてさえ、各〈精神〉の「先天的」諸能力が、各用法における各身体の「先天的」諸能力（〈ressentir〉のほか〈imaginer（想像する）〉もあるために、この表現（諸能力）が使用される）より優先させられ、優位に立つとデカルトに理解されていたことでしかない。筆者はその〈精神〉「優位」<sup>(186)</sup>の発想がわけても〈日常的用法〉にあって、身体の〈ressentir〉に影響を与えずにおかなかったと知る<sup>(187)</sup>。（この〈ressentir〉は次号で検討される。）

### ① デカルトのいう〈sentir〉について

引用文⑩での〈精神（âme）〉の「先天的」能力〈sentir（感じる）〉が前段最後に記したことへの解答例となる<sup>(188)</sup>。〈sentir〉はこの〈能動〉〈運動〉によって、〈âme〉に受け入れられた身体の〈sens〉を〈âme〉の〈sentiment（感覚）〉にするうえで有効な能力である。〈âme〉での身体の〈sens〉の〈sentiment〉化は繰返すが、次のようにして成った。すなわち〈sentir〉が〈âme（腺）〉に伝わった身体の〈sens（感覚）〉に、〈sentir〉のいわば根城である〈理性的精神（脳本体）〉から〈神経を介して〉出て〈âme（腺）〉へ「働きかけ」、〈腺〉で身体の〈sens〉を〈腺（精神）〉の〈sentiment（感覚）〉にすると。

そもそもデカルトが〈日常的用法〉において、〈脳〉の一部位にすぎない〈腺〉や〈脳本体〉をそれぞれ、〈âme〉や〈âme raisonnable〉なる〈精神〉に見立てたことで、〈精神〉の方が〈脳〉を含めていう身体より、だからその〈精神〉なかでも〈理性的精神〉に生まれつきあるとされる諸能力もまた、身体の「先天的」諸能力（〈ressentir〉や〈imaginer〉）より「優位」に位置づけられてくる、あたかも〈精神〉なかりせば身体なしという表現が適當するわけである。〈脳〉（身体）の代わりに〈精神〉を宛がうは、彼が〈精神〉を「優位」にみるからにほかならない。しかしながら〈理性的精神〉を出所とする「先天的」諸能力のう

ち、今引用文⑩で問う必要がある〈sentir〉(ほかに〈imaginer〉も該当する)は、何度も記した引用文<sup>(189)</sup>の〈concevoir(理解する)〉や〈affirmer(肯定する)〉などとは別扱いされるが、かえって特徴づけられることを示唆させてくるのである。

それは、〈sentir〉(や〈imaginer〉)以外の能力がすべて、〈脳本体(理性的精神)〉のなかでだけで「働きかけ」て、たとえば〈passion(情念)〉のごとき新たな能力を〈脳本体〉にて〈表象〉する<sup>(190)</sup>に反し、〈sentir〉(や〈imaginer〉)がすでに指摘した通り、〈脳本体〉からその〈神経を介して〉、〈腺〉に伝わった身体の〈sens(感覚)〉に「働きかけ」ては、新たな能力〈sentiment(感覚)〉を〈腺〉にて〈表象〉することにあつた。要は〈sentir〉(や〈imaginer〉)が〈脳本体〉から出て、〈腺〉において「働きかける」ということである(〈imaginer〉は〈sentir〉と同様な作用をなすのを示すために付記されるが、もとより〈sentir〉とは異なる新たな能力〈imagination(想像)〉を〈表象〉させる能力であつた)。

だがデカルトはなぜこうした区別を試みるのか。本稿註(184)ならびに註(189)の各引用文に記される諸能力のなかで、この〈sentir〉や〈imaginer〉が各引用文中、そろって一番あとの方に書き足され並べられているのは事実である。そこでは彼は、これらの能力が確かに〈理性的精神〉の諸能力に加えられるとみられども、〈理性的精神(脳本体)〉から出ることを意図する以上、おそらく〈脳本体〉より遠ざけられることを望んでいたにちがいない。〈脳本体〉から〈sentir〉や〈imaginer〉を切り離すことは、これらの能力が〈脳本体〉内では「働きかけ」ないし、まして〈脳本体〉内にその〈感覚〉や〈想像〉のおのおのを産出させることもなくなるからである。これらの能力とかりに産出されるとみよう諸能力を、要はまるで身体とかかわりそうな以上の諸能力をできるだけ〈脳本体〉より除くことは同時に、この〈理性的精神〉にはその役割である、純粋に〈penser(思惟する)〉しかない能力が居座らなければならぬことを意味させる。

それでも今問う〈sentir〉が〈理性的精神〉の諸能力の一とみられる<sup>(191)</sup>は、デカルトの上記引用文⑩によれば、〈sentir〉が〈recevoir(受け入れるや認める)〉や〈connaître(認識する)〉と、あるいは〈見ると思われる〉、〈聞くと思われる〉や〈熱くなる(熱を感覚する(ressentir))と思われる〉と同意になり、しかも〈penser(思惟する)〉にほかならなくなると述べられるからである。要するに〈sentir〉

は、〈理性的精神〉の「先天的」諸能力を〈penser（思惟する）〉で代表させていうなかの一能力なのであり、この〈思惟する〉がまた「人間（精神）」の「認識（知る作用）」を掌るとされるからして、すでに記したように〈能動〉〈運動〉しかしない能力であるといわねばならぬ。

そこで〈sentir〉が〈熱を感覚する（ressentir）と思われる〉でもあるのを一例にすると、筆者はここからようやく、先きに一見した〈ressentir〉の結語に導かせる理由を語ることができよう。〈sentir（感じる）〉は〈ressentir（感覚する）〉とは意味を少なからず異ならせる。なぜなら〈感覚する〉は〈感覚すると思われる〉ではないからである。しかし〈感覚すると思われる〉という〈sentir〉が〈penser（思惟する）〉に与する一能力であるにしても、その〈感じる〉の中味に〈感覚する〉をあわせ有することに気づかされる（〈sentir〉はそのうえ字面において、およそ〈思惟する〉に關した〈と思われる〉を付け足し、これを前面に出すとみられるからして、〈penser〉の一にもなるわけである）し、〈精神（腺）〉にて〈感じる〉として、あるいは身体（感覚諸器官）にて〈感覚する〉として各「働きかける」と捉え得るが、〈精神〉と身体なる各部位の相違からも、筆者は〈sentir〉と〈ressentir〉の各「働きかけ」を同じにすべきではない（このために前者を〈感じる〉と、後者を〈感覚する〉と訳したわけである）というにせよ、それでもこの〈感じる〉や〈感覚する〉を同種の能力に扱わずにはおれないのである。

これを肯定し得るは、〈感覚する〉が接頭辞〈res〉を〈感じる（sentir）〉に加え<sup>(192)</sup>、〈res〉はここでは「再び（もしくは繰返し）」を含意させるからである。〈sentir〉と〈ressentir〉が共通な綴字を基にした「同種の能力」とみられればみられるだけ、両者の語は無関係でいられない。それでは二つの語はいかなる関係にあるといえるのか。筆者がこれまでにみてきたところからすると、それは〈ressentir〉が〈sentir〉から成る語の関係を、かつ〈sentir〉に属すほかない関係をかたちづくるにある。以下はその注釈に当てられる。

〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」の各〈精神（esprit）〉においてはむろんのこと<sup>(193)</sup>、〈日常的用法〉の〈精神（âme（腺）や âme raisonnable（脳本体））〉にあっても、デカルトには身体より〈精神〉が「優位」と把握されていること、したがって身体（感覚諸器官）の諸能力（〈ressentir〉は諸能力の代表）より、〈精神〉の諸能力が「優位」とみなされることが、今問う〈ressentir〉に

影響してくる。〈日常的用法〉での〈âme raisonnable（理性的精神）〉の諸能力の一である〈sentir〉は〈penser（思惟する）〉に与する能力であり、〈sentir〉がいかに〈自動機械〉〈運動〉に従われども、そこに〈思惟（する）〉を伴わずにおれない〈能動〉〈運動〉であった。だから筆者が〈sentir〉が〈理性的精神（脳本体）〉から「出て」「働きかける」と断じたことは、〈sentir〉たる〈脳本体〉の〈神経を介して〉の〈能動〉〈運動〉が何も〈精神（腺）〉での〈sentiment〉の産出のためだけにとどまらず、ときにはまた身体感覚諸器官に伝わり、そこで〈sens〉の産出にかかわることを含意させている。

身体（感覚諸器官）での〈sens〉の産出の際、デカルトがしかし、〈sentir〉それ自身にでなく、あたかも〈sentir〉を「再び（もしくは繰返し）」「働きかける」謂の〈ressentir〉に置換させ、かつこの〈感覚する〉を身体感覚諸器官の各「先天的」能力とみなした<sup>(194)</sup>のも事実とすれば、これをどう理解し得るかなのである。筆者が以前、〈ressentir〉の用法の一として、これを〈精神（腺）〉にて、一度〈sentir〉が「働きかけ」たあと、「時間」を経て、「再び感じる（再び働きかける）」と表記した<sup>(195)</sup>ことで分かるように、彼が〈ressentir〉を使用する場合、それは〈理性的精神（脳本体）〉からその〈神経を介して〉「出る」〈sentir〉をば、一方での〈精神（腺）〉において、〈sentiment（感覚）〉を「再び」〈感じる〉ことに（ここに註(195)の拙論で、〈sentir〉を〈脳本体〉より「出」さずに、そこで〈passion（情念）〉を「再び」〈感じる〉ことが〈ressentir〉になるとも記したごとく、彼は〈ressentir〉をいずれの部位にかかわる能力となすか明確にしていなと述べたことを繰返しておく）、他方での身体（感覚諸器官）において、「再び」〈感覚する〉ことにして用いる以外になかったと推察される。

だがここは身体（感覚諸器官）における〈ressentir〉に、筆者が「再び（もしくは繰返し）」をつけず、たんに〈感覚する〉とした訳にせざるを得ない理由を再度確認しておく必要がある。まず、「再び感覚する（ressentir）」の「再び」とは〈sentir〉の「再び（もしくは繰返し）」を意味させるがゆえに、〈ressentir〉は本来〈感じる〉との訳でよいことにある。次に、デカルトが現に〈理性的精神〉の一能力を〈sentir〉と、本稿引用文⑩や註(194)註欄での身体を代表させる能力を〈ressentir〉に区分けし、筆者がこれに倣い、わけても〈ressentir〉を〈感じる〉とせず、〈感覚する〉と訳したは、彼にとって〈ressentir〉がその実〈sentir〉に等しいにもかかわらず、しかし筆者には、〈理性的精神〉から「出る」

〈sentir〉が〈精神（腺）〉に向かう（伝わる）のではなく、身体感覚諸器官の一に向かい、そこで「働きかける」能力にしかならないと、だからこそ彼も身体に伝わる〈sentir〉を〈ressentir〉にして解するとみえたことにある。そして、〈精神（腺）〉での〈sentir〉が、また身体での〈ressentir〉が各「働きかける」〈能動〉であるのは、彼のいう、〈日常的用法〉における〈精神（腺）〉と〈理性的精神（脳本体）〉を含めた「精神」とされるものが可能にする〈運動〉に基づくものであり、これにより、「精神」の方が〈日常的用法〉においてさえ、身体より優先され、「優位」にみられてしまうのも間違いないことにある。

「精神」が「優位」となる見方は、たとえば〈能動と受動（たる〈運動〉）はたえず同じ一つの事柄にせずにはおかない〉という既出引用文<sup>(196)</sup>のもう一つの読みによっても明らかにされる。その段落に記したことをまとめると、それは、内臓（諸器官）を含む身体感覚諸器官や〈精神（腺）〉の各部位に、それぞれ「働きかける」〈ressentir〉や〈sentir〉の〈能動〉と、各〈能動〉の惹起に伴う〈受動（たる〈運動〉）〉がおのおので〈同じ一つの事柄〉として捉えられることにあった。しかるにこれも多少触れおいたが、ここで明確にしておく、すなわち〈能動〉の〈運動〉は〈精神（理性的精神）〉を基点に発することを、また〈ressentir〉は〈sentir〉という〈能動〉の〈運動〉に帰することをもってみると、その「もう一つの読み」が可能になる。

「もう一つの読み」は、まず〈ressentir〉を例にすれば、〈ressentir〉が身体感覚諸器官の一に所属し、それぞれを出所とした固有の〈能動〉能力ではないことに、また〈精神（腺）〉に「働きかける」〈sentir〉を欠いては、〈ressentir〉はデカルトに構想されなかったし、まして〈能動と受動〉たり得なかったことに、そして〈sentir〉が〈理性的精神（脳本体）〉の諸能力の一であっても、そこから「出」て「働きかけ」ないでは〈受動〉を伴わせないし、同時に〈ressentir〉の〈能動と受動〉も生じないと理解されることにある。とどのつまり筆者は、身体に受容されよう「対象」に「働きかける」〈ressentir〉はもとは〈sentir〉であって、彼は身体に向かう〈sentir〉だけをばたんに〈ressentir〉にしたとみる。だから〈sentir〉が「働きかける」とき、〈脳本体〉から「出る」〈sentir〉をして、繰返すが、身体にては〈精神（âme）〉ではなく、身体のために、彼に〈再び感じる〉ごとき〈ressentir〉に換言させ、身体（感覚器官）で彼が最初の「認識の起こり」たる身体の〈sens（感覚）〉を生み出す因に〈ressentir〉を用いる

がゆえにも、その訳には〈感覚する〉が当てはまるばかりか、〈ressentir〉は〈sentir〉と、要は「精神」とつながりある〈能動〉能力になると指摘したし、ここでそう断じるほかない。だからまた〈sentir〉（の〈能動〉〈運動〉自体）が、要は「精神」が身体（感覚諸器官）に対し「優位」に立つといわれなくてはならなくなるのである。

一方、身体の〈sens〉が「たえず」とはいわずとも、ときに〈精神（腺）〉にさえ伝わるからして、「精神優位」に見立てられる「精神」が〈精神（腺）〉でその〈sentiment（感覚）〉を〈思惟する〉際、〈sentir〉が〈理性的精神（脳本体）〉から「出」て、〈腺〉内の身体の〈sens〉に「働きかける」ことで、身体と「精神」は「つながり」をみせる。また「精神」内での「つながり」として、〈腺〉の〈sentiment〉の〈脳本体〉への伝達がときにみられ、このときこれに、〈脳本体〉中の〈vouloir〉（もしや〈ressentir（再び感じる）〉も<sup>(197)</sup>）が「働きかけ」て、〈passion（情念）〉をもたらし場合があった。〈腺〉から〈脳本体〉への能力の伝達における「つながり」自体は、再度後述もしよう「まったき〈自動機械〉〈運動〉」によるが、それでも上記した各部位からみて、おののちに受容される〈受動〉の度のあとで、たとえば〈sentir〉や〈vouloir〉が〈理性的精神〉の〈思惟する〉指令（意志）のもと、各「働きかける」のではなく、真先に「働きかけ」ては、「働きかけ」られた能力を〈受動〉にするようにある。そう理解せずに、「働きかける」〈能動〉は〈同じ一つの事柄〉とされる〈受動〉と「つながり」る（かかわる）ことすらなくなろう。

すると〈能動と受動は同じ一つの事柄〉であることは、〈ressentir〉と〈sentir〉や〈vouloir〉の各〈能動〉も身体感覚器官と〈腺〉や〈脳本体〉のおののちに共通に現象することだから、各〈能動と受動〉が何も各部位にて〈同じ一つの事柄〉になるとみずとも、「精神」が身体として捉えられる各部位との「つながり」を見出せることでは、この「つながり」すべてを「精神」の〈sentir〉に帰着させていう〈同じ一つの事柄〉であってよい（〈sentir〉は〈理性的精神〉を「出る」が、「出る」ところも〈腺〉に向かう〈脳〉であれば、筆者はこの〈脳〉を「精神」との鉤括弧付けで表現するほかなかった）。それこそこうした読みでも、「精神優位」を明かすのである（ただ正直いって、筆者には、〈日常的用法〉での引用以外の鉤括弧の精神は、そこに含有されて語られる、〈精神（腺）〉より、〈sentir〉の関係した〈理性的精神（脳本体）〉の方をさすとみえたりもする。

それは〈sentir〉が「精神優位」を明かす根拠になるからだが、しかしその「優位」たる「精神」の活動の場が〈脳本体〉ではあり得ないのだから、「精神」は〈運動〉する〈腺〉とも、また上記した〈脳〉〈全体〉とも受け取ることができる。そこがよく分からない、要は〈不明瞭、難点〉を脱し切れないところである。それに筆者のいう「精神」のことはともかく、デカルトがどうして〈日常的用法〉の精神に二つの〈精神〉を明記するか。これも〈同じ一つの事柄〉にすぎなくなるやもしれぬが、それでも〈精神〉としては各個別の働きしかないこの〈矛盾〉を回避したくば、彼は「精神」内とした各部位の表現でよしとし得たはずなのに、なぜであろうか。

さらに「精神優位」を証しする〈sentir〉の〈能動と受動（たる〈運動〉）〉が何かは、〈そのほかの自動機械（すなわち自分自身（自我）を動かすそのほかの機械）〉という既出引用語<sup>(180)</sup>をもって明示される。筆者はこの〈自動機械〉を〈能動（と受動）〉〈運動〉と、〈自分自身（自我）を動かすそのほかの〉に合致させては〈思惟する〉と見立てた。だから〈そのほかの〉の範疇に与しない〈自動機械〉は、筆者がすでに記しおいた「まったき」〈自動機械〉となる。これはまさしく身体感覚諸器官から〈腺〉そして〈脳本体〉にまで伝わる際の、身体受容器がなす「受容」という〈受動〉の〈運動〉なのである。かつ「まったき〈自動機械〉〈運動〉」は、「精神」のかの能力〈sentir〉が〈能動〉として「働きかける」ときに、これに対応する〈受動〉にもなり得る〈運動〉である。それこそ「精神（sentir）」にとって、〈能動と受動（たる〈運動〉）〉を、とどのつまり「精神」と身体を、〈同じ一つの事柄〉にすることである。〈sentir〉の〈能動〉での〈受動（たる〈運動〉）〉は、〈精神〉の各部位（〈腺〉や〈脳本体〉）や身体感覚諸器官における、各〈能動〉の度の「まったき〈自動機械〉〈運動〉」にすぎなくなる一方、〈能動（たる〈運動〉）〉は前記した通り、〈sentir〉や実質〈sentir〉である〈ressentir〉という能力の〈運動〉であって、おのおの〈感じる〉や〈感覚する〉ように「働きかける」〈そのほかの自動機械〉〈運動〉をさした。しかもこれは繰返しおくが、〈思惟する〉という〈能動〉の〈自動機械〉〈運動〉でしかなかった（「精神（sentir）」すなわち〈思惟する〉が〈自動機械〉（〈運動〉）とも記されるは何ゆえかを後段で語る必要がある）。

たとえば〈見る（voir）〉は、目なる身体感覚器官での〈ressentir〉に属す一〈能動〉〈運動〉と解し得るし、〈見る（志向・意志する）〉という〈思惟する〉



能力にほかならなくなる。なぜなら本稿引用文⑩の〈sentir〉がデカルトをして、〈je vois la lumière（わたしは光を見る）〉〈と思われる〉や、〈je ressens la chaleur（わたしは熱を感覚する）〉〈と思われる〉といわせた〈penser（思惟する）〉であるのと同じく、この〈voir〉や〈ressentir〉さえ、⑪でいう〈il me semble que（と思われる）〉の対象として関係するし、筆者の主張のごとく、〈sentir〉に変わりのないのがこれで分かるからして、〈思惟する〉を出所にせずにおれない能力といえるからである。しかし〈思惟する〉〈能動〉〈運動〉の〈sentir〉が〈理性的精神〉に「先天的」能力として配置されていないとすれば、〈ressentir〉が身体能力となって用意されたり、〈sentir〉の代わりをなしたりする必要も、そのうえ〈感覚すると思われる〉に関与する必要もなくなるからである（〈ressentir〉が〈sentir〉すなわち〈penser〉を出所とせざるを得ないは、それだけで「精神優位」を明らかにするほかない、換言すると〈感覚する〉も〈感じる（思惟する）〉に属すとみるうへは、〈感じる〉能力と〈同じ一つの事柄〉にさせるばかりか、「先天的」能力であるほかない<sup>(199)</sup>。また「精神優位」によって、いわゆる〈心身合一〉が彼に証明されようものならばなおさら、果たしてその〈心身合一〉は本物か、次号にて問うにせよ、少なくとも〈心身合一〉を謳う〈日常の用法〉も〈真理の探求〉に劣らず<sup>(200)</sup>、「精神優位」を前提に構築されたにちがいないと認められる）。

〈sentir〉を〈penser〉に加えずば、〈sentir〉は何も〈理性的精神（âme raisonnable）〉の「先天的」諸能力の一である必要がない。だがそうであっても、〈sentir〉は〈理性的精神（脳本体）〉内で働きかけたり、何らかの新たな能力を産出させたりする能力ではなかった<sup>(201)</sup>。〈sentir〉はたんに、〈腺〉という〈精神（âme）〉にかかわって、〈âme〉での新たな能力〈sentiment（感覚）〉を生み出す「先天的」能力であった。〈sentir〉が「働きかける」〈腺〉はそのかわりにおいて〈âme〉になり、〈sentir〉はまた〈腺〉に欠けてはならないその〈âme〉の「先天的」能力にみられるのである（これは繰返すが、〈sentir〉が〈能動〉として「働きかける」ことで、〈腺〉をも〈精神（âme）〉にせざるを得ないのを示唆させるから、「精神優位」を確実にする）。ところが問題はデカルトに、一方で〈sentir〉を両〈精神〉に関連する「先天的」能力となってみなされるは否定しないまでも、他方で〈sentir〉が〈そのほかの（〈思惟（する）〉）という自動機械〉（〈運動〉）に与すると語られる〈自動機械〉のことをどう理解しておくべき

か。たとえば〈sentir〉はその出所であった〈理性的精神（脳本体）〉を「出る」（離れる）から、〈自動機械〉（〈運動〉）でしかなくなるのか、それとも〈自動機械〉は彼が〈脳本体〉や、もう一つの〈脳〉の部位たる〈腺〉すら〈精神〉と呼んだと同じように、〈精神〉に、とりわけてその内部にとっての〈自動機械〉（〈運動〉）には、いかなる〈身体（延長）〉もないと読んでよいのか、いったい〈思惟する〉〈自動機械〉とは何かなのである。

筆者は、五官（感）の「求心的」なる〈運動〉を、また内臓の一である心臓を仲立ちにしての〈血液〉の「求心的」「遠心的」に循環たらしめる〈運動〉を「まったき〈自動機械〉〈運動〉」として捉えた。ここにいう〈sentir〉はしかし、五官（感）や内臓のいずれかの〈神経〉を通し、〈腺〉（の内部）まで達する身体の〈sens〉に対して「働きかける」「能動」〈運動〉であってみれば、少なくとも身体感覚器官と内臓（感覚器官）や〈腺〉に伝わり「受容」されよう各〈受動〉たる「まったき〈自動機械〉〈運動〉」とは異なるであろう。それに〈sentir〉が〈能動〉ゆえに、上記〈受動〉たる〈運動〉の方向と逆に作用し、しかも〈思惟する〉を有する〈自動機械〉〈運動〉であるだけに、〈自動機械〉〈運動〉は前記した例のごとく、〈sentir〉が〈脳本体〉を「出」てから、〈腺〉の外部（表面）に伝わるまでの間のそれにかぎらせてみるほかない。そこは依然〈脳〉であり、〈脳〉は身体をさすからして、その〈運動〉には〈自動機械〉という表現が適当される。さらに〈そのほかの〉を〈思惟する〉と読んだ〈自動機械〉とは〈腺〉までさえも〈思惟する〉を伝える〈運動〉となる。これなしに〈思惟する〉は〈腺〉の内部に伝わらない。だが〈腺〉内部がまた〈自動機械〉として〈運動〉するとすれば、〈腺〉内部は〈精神（âme）〉とされることはないであろう（〈腺〉を明確に〈精神〉）というは〈腺〉内部を代表させるにある<sup>(202)</sup>。こうして〈思惟する〉も〈自動機械〉として伝わるのが明かされるばかりか、以上を含ませたところにしか、〈思惟する〉〈自動機械〉とした表現の真意がみえてこないのである。

他方〈思惟する〉〈自動機械〉（〈運動〉）はこうも推し量れよう。これを字義通り、〈思惟する〉という〈自動機械〉（〈運動〉）と捉えてよいならば、そこで意味されるは、身体の一〈運動〉である「まったき〈自動機械〉〈運動〉」のほかに、〈思惟する〉、要は「働きかける」〈能動〉たる〈自動機械〉〈運動〉があることになる。〈sentir〉も組み入れられる〈思惟する〉を身体がではなく、〈脳〉

全体で〈運動〉させるうえでいう「精神」が有するがゆえに、〈思惟する〉〈自動機械〉は「精神」だけの〈能動〉としての〈自動機械〉に見立てられるわけである。これと前段で語ったこととのどちらが、あるいはまったく別のことが正しいか分らないが、ここで繰返してでもいわねばならぬことは、〈思惟する〉という〈能動〉〈運動〉は、心臓における〈血液〉のようにたえず〈運動〉しているのでなく、〈理性的精神〉の〈思惟する〉諸能力のうちの〈sentir〉がそこを「出」て、〈腺〉（の内部）に達し「働きかける」あるときに、ここにすでに「受容」された身体の〈sens〉を〈受動〉にするということにある。このように、「とき」を前提とせずば、デカルトは〈能動と受動〉を〈同じ一つの事柄〉にさせるとはいえなかったのである。

## 〔続〕

以下の註の番号が(166)から続くのは、本稿が前号「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕」の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

## 註

- (166) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕」, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第113輯, 2003年, 参照。
- (167) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕」P.115, 新潟大学言語文化研究, 第9号, 2003年, 参照。
- (168) 同上P.105参照。
- (169) ただしシモーヌ・ヴェーユ独自の認識論において、〈感受性〉や〈受動的感受性〉以外の、デカルトの「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論で用いられる、ほかの諸能力に対してさえ、彼女は果たして、これらの働きかけが同じになるとみたのかどうかである（筆者は紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕」P.60-62で、たとえば彼のいう〈sentir〉を〈反射〉に捉えたことは、それが彼女にとって、彼の「もう一つの真理の探求」たる用法の認識論にかさねあわせる制約のもとに使用させられねばならぬにしても、後日の『哲学講義』に記された内容を鑑みれば、上記した通り、決して同じにはならないはずである）。こうした彼女独自の認識論が総じて何かにあつては、現在彼の認識論を主に考察しているところから、いずれ機会を得てまとめる必要があると考えている。つまり筆者は、すでに連続稿紀要「感受性試論」中の〔1〕（新

新潟大学教養部研究紀要、第17集、1986年）と〔Ⅳ〕（同上、第20集、1990年）で図を取り入れるなどして素描したが、それらでの用語が統一されない不備もみられるからして、来たるべきときに、彼女独自の認識論全体を語ってみたいということである（これについては本文次の段落で多少の説明がされている）。

- (170) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』P.29、新潟大学人文学部人文科学研究、第112輯、2003年（そこに「女性哲学者」と明記している。彼女に付された多くの肩書のうち、筆者にとってもっともふさわしいと思われるそれは、この哲学者であろうが、彼女自身はしかし、その命名さえ拒むであろう。〈生き（てい）る〉〈生きもの〉にあって、肩書は何に役立とうか。ただ筆者が彼女を哲学者とみなすのは、学士論文に彼女（独自）の認識論があるからである。認識論がみられるならば、哲学者と断じてよい事由は本文次段落を参照してもらうにしても、この学士論文には少なからず、彼女自らを哲学者たらしとさせる彼女の意気込みが感じられる。それなくして、〈感受性〉を打ち出す必要などないと筆者は読む）参照。

- (171) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕』P.116註(94)註欄参照。

- (172) 同上〔補Ⅲ④〕（本稿註(168)）参照。

- (173) 同上〔補Ⅲ②〕P.112註(135)参照。

- (174) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》(PREMIÈRE PARTIE) P.695 (ART 1), Gallimard.

- (175) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕』P.60（上記註(174)の『情念論』P.697 (ART 6) に〈autre automate (c'est-à-dire autre machine qui se meut de soi-même) (そのほかの自動機械 (すなわち自分自身 (自我) を動かすそのほかの機械))〉という語句が記される。ここでは本文でのちに述べる注釈とかさなるであろう〈soi-même (自我)〉に注意したい。つまり筆者は〈automate〉をデカルトが〈そのほかの〉と繰返し強調するかぎり、「まったく〈自動機械〉」と捉えてはいないということである）参照。

- (176) 「働きかける」という邦語は、たとえば上記註(175)中の〈se meut (se mouvoir) (動く)〉や、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』引用文②(P. 3, 新潟大学人文学部人文科学研究、第108輯、2002年)と同上紀要〔補Ⅰ〕引用文⑤(P.22)中の〈agir (ふるまう, 作用する)〉の原語などと同意である。

- (177) 本稿註(175)註欄参照。

- (178) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕』参照。

- (179) René DESCARTES 《MÉDITATIONS》(PREMIÈRE) P.270に〈étendue〉の一

例がある。また〈pensée〉については、本文のちに掲載する引用文⑩を参照。

- (180) Ibid; (SECONDE) P.279. (この引用文はすでに、紀要『なぜ感受性なのか(3)』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第94輯, 1997年) P.3に⑩として掲載した引用文であるが、当時の訳語とは今回多少異なっている) 参照。
- (181) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》(ART23) P.707, Gallimard (この引用文もすでに、紀要『シモース・ヴェューとデカルト〔補Ⅰ〕』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第110輯, 2002年) P.27に⑩として掲載した引用文であるが、当時の訳語とは今回多少異なっている) 参照。
- (182) 紀要『シモース・ヴェューとデカルト〔Ⅱ〕』引用文⑩P.73, (新潟大学人文学部人文科学研究, 第106輯, 2001年) 参照。
- (183) 紀要『シモース・ヴェューとデカルト〔補Ⅲ②〕』引用文⑩P.113 (新潟大学言語文化研究, 第9号, 2003年) 参照。
- (184) 紀要『シモース・ヴェューとデカルト〔Ⅳ〕』引用文⑩P.1 (新潟大学人文学部人文科学研究, 第108輯, 2002年) や『なぜ感受性なのか(3)』引用文⑩② P.P.1-2 (の同じ引用文中に〈connaître〉が記されている) 参照。
- (185) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》(PREMIÈRE PARTIE) P.697 (ART 6), Gallimard.
- (186) 紀要『シモース・ヴェューとデカルト〔Ⅱ〕』P.P.85-86 (「もう一つの真理の探求」でも〈esprit〉「優位」かどうかは、本稿註(183)の引用文がこの用法ではどうなるかとともに、次号以降の筆者の課題になろう) 参照。
- (187) 「〈ressentir〉に「人間(精神または思惟)」が注入されるとの筆者の指摘が「もう一つの真理の探求」における〈ressentir〉にも当てはまるといえるかは次号以降で検討する。
- (188) 引用文⑩の〈sentir〉を〈真理の探求〉の〈精神(esprit)〉の一能力として理解し、⑩にはこの用法が語られるとみてもかまわないが、それでも本文で述べた引用文⑩の場合と同様に、この用法では〈sentir〉は「働きかけ」てはならないし、だから〈esprit〉としての〈sentiment〉が〈表象〉することもない。要はこの用法にとって、〈sentir〉は「排除」されるべき能力となる。
- (189) 本稿註(184)(本文以下の〈concevoir〉や〈affirmer〉はその紀要前者の引用文⑩⑪と⑩⑫と⑩⑬にそれぞれある) 参照。
- (190) 本文でも後述する通り、まず身体とできるだけ無関係であるのが〈理性的精神〉であること、そこで〈表象〉する〈情念〉によっても(〈passion〉は〈腺〉に起因する〈âme〉の〈sentiment〉の一が〈脳本体〉に伝わり、そこで〈vouloir〉

の「働きかけ」を受けて成る), 心身合一は成り立たないこと(なぜなら〈情念〉は〈精神〉としての能力であり, 身体とかかわることがないから)が確認されるべきである。なお〈情念〉についての詳細は次号以降に譲る。

- (191) 紀要『デカルトにおける理性と感覚(4)』引用文⑤P.68(新潟大学人文学部人文科学研究, 第101輯, 2000年), 紀要『なぜ感受性なのか(2)』引用文④P.41(同上, 第93輯, 1997年)や, むろん本稿引用文⑦にも〈sentir〉が語られる)参照。
- (192) 〈sentir〉に接頭辞 re- ではなく, res- を付けるのは(一般には re- である), 〈sentir〉の綴字〈s〉を「無声子音〔s (ス)〕」に発音させるためである(re- の場合は「有声子音〔z (ズ)〕」と発音され, これを避けるにある)とされる。  
(ル) サンティール)
- (193) 「もう一つの真理の探求」においても〈精神(esprit)〉「優位」とみる証明は, 次号以降に譲るしかない。この拙論では, この用法に融合する〈日常的用法〉に関する〈精神(âme と âme raisonnable)〉の「優位」について本文これ以降, 主に語ることになる。
- (194) 筆者は〈ressentir〉と〈sens〉が関係している一例を《RÈGLES POUR LA DIRECTION DE L'ESPRIT (精神指導の規則)》(RÈGLE XII, P.P.78-79)中の〈Cinquièmement enfin〉からの段落にあるとみてとり, この関係を証明することができる。ただその段落すべてを引用するとすると, かなりの行数を必要とするので, 原文の取り上げはしない。だがこの原文中(P.79)に, 〈voir〉や〈toucher〉なる視覚や触覚の能力の語があり, これらが各〈sens(身体感覚)〉にかかわるという〈sens〉の語が見出され, 上記のように語られている。これこそまさに, シモーヌ・ヴェーユが既出引用文⑥でいう〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉に, また筆者がいう「対象」に, 〈voir〉や〈toucher〉, すなわちこれらを代表し一括させていう〈ressentir〉が「働きかけ」で, 身体感覚諸器官のそれぞれで〈sens〉を産出せしめることをさすわけである。要は〈ressentir〉の「働きかけ」によって, 〈sens〉の成ることが明かされるのである。
- (195) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』P.P.34-36(そこには〈ressentir〉が身体ではなく, 〈精神〉の能力として使用されるとみる私的見解が記される。またこの一例は, 紀要『なぜ感受性なのか(3)』(引用文④②P.P.7-8)にみられる。ただし④②でも, 本文括弧内に述べた通り, その〈精神〉が〈âme(腺)〉か, 〈âme raisonnable(脳本体)〉をさすか不明瞭であるといつてよい。いずれかの明記もないから, ④②中の〈de la douleur〉を〈ressentir〉の「働きかけ」において, 〈腺〉での〈sentiment(感覚)〉とも, 〈脳本体〉での〈passion(情

念)》とも受け取ることが可能になってくる。㉓②には確かに〈sentiment〉と記されるが、しかし〈sentiment〉それ自身だけで、後者の紀要引用文㉓①(P.20)によれば〈情念〉と呼ばれるがゆえに、〈腺〉や〈脳本体〉の各「新たな」能力のいずれになるかわからずじまいにしかならない) 参照。

(196) 本稿註(174)の段落参照。

(197) 本稿註(195)註欄参照。

(198) 本稿註(175)註欄参照。

(199) 「時間的経過」での身体能力〈ressentir〉もあると推察するが、そうした〈ressentir (再び(繰返し) 感覚する)〉については、ここで触れない。ただ内臓を含めた身体感覚諸器官はそれこそ身体に無数にあるといえるから、「時間」が経ったところでの〈再び感覚する〉とみなすよりも、複数の感覚器官において同時に、また「時間」を経ても、「感覚する」と捉えてよいのではないか。何しろデカルトは身体における、何らかの「対象」を「時間」をかけて〈再び(繰返し) 感覚する〉という〈ressentir〉の例をもち出し明記してはいないのだから。なお本文に記した「先天的」は生まれつきのことであり、これ以上は次号に譲る。

(200) 「精神優位」が徹底化されたのが〈真理の探求〉の用法であると察知し得る。だからこの用法が緩やかになったのが〈日常的用法〉か、はたまた「精神優位」とみた〈日常的用法〉が、その〈sens〉や〈sentiment〉を排除させるごとく徹底されたのが〈真理の探求〉なのかと問われるが、筆者は後者の立場に立つ。すなわち〈日常的用法〉の方が〈真理の探求〉より先きに構想されていたとみる(紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト』〔Ⅱ〕P.P.85-86、と〔Ⅳ〕P.25参照)。

それでも〈真理の探求〉がいかに〈感覚〉(〈想像〉)を取り除いた用法になろうとも、彼女は引用文㉓(同上紀要〔補Ⅰ〕P.P.17-18)でいう〈矛盾〉は解決されない。すなわちこの用法は〈観念論〉に終始せず、〈實在論〉を〈両立〉させ〈相関的〉でもあると彼女に理解されるからである。

(201) ただしデカルトは、〈精神〉にあって、〈sentir〉が「時間的経過」のもとの〈再び感じる(ressentir)〉を可能にさせるのは〈腺〉でか、〈脳本体〉でか、それとも両部位でかどうかを明確にしていないとここで再度指摘しておく(このことはすでに、本文註(195)の周辺、同註欄に、また〈脳本体〉での新たな能力がたとえば〈情念〉であることも、本稿註(190)註欄に記しおいたので参照のこと)。

- (202) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅱ〕』引用文⑩, P.73 (そこに〈その機能を直接に発揮する小さな腺〉とあるが, 〈(小さな) 腺〉が〈機能を直接に発揮する〉かぎりには, 〈腺〉の外部(表面)ではなく, 〈腺〉の内部でなければならない。だから引用文⑩の〈精神というもの(âme)〉は〈腺〉の内部をさすことに充当する。この証しとなるのは, 紀要『デカルトにおける理性と感覚(4)』P.68, 引用文⑤である。ここに記される〈想像と共通感覚の座である腺H〉なる表現中, 各〈座〉こそ〈腺(H)〉の内部になければならないからである。さらに, 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕』(新潟大学人文学部人文科学研究, 第109輯, 2002年) P.P.21-22, 引用文㉓と㉔を読むと, これらに〈動脈〉そしてその〈細糸〉と記されるが, それらは〈腺〉の内部になければならないし, その内部から, 〈感覚(sentiment)〉が⑤の〈腺Hの表面〉に〈表象〉されると書かれるからである) 参照。